

大きくなって帰ってきてね！～ 荒川にサケの稚魚を放流しました

去る3月6日、クリーンセンター北側の荒川河川敷で、恒例となりましたサケの稚魚の放流会が行われました。今年も吉井田小学校の4年生など約100人が参加し、約3000尾の稚魚を放流しました。

放流会に先立ち、亀田良徳FAN副会長が子どもたちに、「サケは放流して4～6年でふるさとの川に戻ってきます。放流する時に、荒川に戻ってくるようにお願いしてください。」と話しました。また、瀬戸孝則福島市長から「放流会は川と親しみ勉強する場所として素晴らしい。川と生活を近いものにしていって下さい。」、佐藤努福島工事事務所副所長から「心を込めて放流してください。」との挨拶がありました。これに答えて、吉井田小学校の佐藤あゆみさんと小林樹莉さんが「また戻ってきてと願いを込めて放流します。大きく立派なサケになって福島の川に戻ってきてください。応援します。」と述べました。

その後、子どもたちからの質問に阿武隈川漁協の堀江氏から回答がありました。

Q：卵が水に流されないのはなぜですか？

A：サケは本能的に卵を産むのに適した場所を探します。いい場所を見つけると30cmくらいの深さまで、しっぽがすり切れるまで穴を掘り、そこに産卵します。産卵と受精の後、掘り返した石を使って卵を覆うようにして水に流されないようにします。

Q：どうしてサケは川でも海でも生きていけるのですか？

A：これは難しいことなのですが、進化の歴史の中で、そのような体になっていったといわれています。



Q：毎年、どれくらいのサケが荒川に戻ってくるのですか？

A：荒川だけでは調べていないのですが、荒川と阿武隈川、摺上川などを合わせて約2000～3000尾のサケが福島に戻ってきます。阿武隈川は上流にダムがあるので、福島市までしかサケはさかのぼれません。去年は約10万個の卵がとれました。

Q：稚魚のえさは何ですか？

A：養殖中は人工のえさを与えています。ここから海までは1～2週間かかるのですが、その間はプランクトンなどを食べ、少しずつえさの食べ方を勉強しています。



子どもたちは稚魚を1尾ずつ心を込めて放流し、最後に「大きくなって帰ってきてね」と呼びかけました。

FANは、このような美しい川を、いつまでも守っていくとともに、子供たちの優しい心を育むきっかけをこれからもつくりたいと考えています。

平成14年度ふるさとの川・荒川づくり協議会定期総会を開催します！



平成14年度ふるさとの川・荒川づくり協議会の定期総会を下記のとおり開催いたします。また、当日は、国土交通省福島工事事務所による「川づくり」をテーマとした講演会を予定しています。皆様お誘い合わせの上ふるってご参加ください。

日時：平成14年4月27日（土） 午前10：00

場所：吉井田支所 2階 大会議室

荒川フェスティバルを開催します！



今年も例年どおり、荒川桜づつみ河川公園および河川敷にて「荒川フェスティバル」を開催します。

FANでは、昨年好評だった「たこづくり教室」の他、荒川を紹介するパネルの展示を今年も行なう予定です。みなさん遊びに来てください。

日時：平成14年5月11日（土） 午前10：00

場所：荒川桜づつみ河川公園および河川敷

■昨年の荒川フェスティバルの様子

川の風景つれづれ

福島は川の多い都市である。阿武隈川、荒川、松川、摺上川が都市の中を流れている。温泉地として名高い土湯や飯坂も河畔に温泉街が立地しているのに、水辺の都市という実感が無い。こんな思いを抱くのは、私だけだろうか。東北でいえば、北上川、中津川、雫石川の三川が合流する盛岡はまさしく水辺のまちという実感があるのに、である。

全国的にみれば、広島や徳島は太田川や吉野川の派川がデルタを形成して都市の中を流れる水辺のまちであり、その都市ならではの水辺の個性を感じ取ることができる。

盛岡と福島の違いは、水面と都市との物理的、視覚的な距離の違いであろうか。橋の上に佇んで、川面の表情を手にとるように眺められるのが盛岡の水辺だ。

広島は、川沿いに平和記念公園や原爆ドーム等の施設が立地し来訪者が多いまちである。それゆえに、各所に親水空間が設けられている。市民の取り組みもまたユニークだ。移動可能な八角形の簡易な施設「オクトカフェ」を河畔に並べ、オープンカフェを実施している。人々が水辺で楽しむための仕掛けである。

また、徳島では、新町川の水辺の再整備によって、人々の流れが変わり、水辺に洒落たお店が立地しはじめている。

水辺に市民が憩う、そんな光景がみられるからこそ、水辺の都市としての実感が沸くのではないかと、思う。川辺で皆が楽しむことができる福島の芋煮会は素晴らしい。でも、普段市民が水辺を楽しむことができる仕掛けとそのための空間がもっと福島には必要ではないだろうか。（伊藤 登）

〇広島市・元安川の「オクトカフェ」～広島市パンフレットより

